

自由の森学園高校 ⑤  
(飯能市)

# 至る所で「自由」学ぶ

同校は1985年、「競争原理を超える教育」を目指した数学者の遠山啓氏の理念をもとに創立。点数により順位を付ける教育は「自分と向き合う学びにならない」と、テストを実施しない。「教諭と生徒は対等な人間同士」という考えから、生徒は教諭を「さん」付けで呼ぶ。やりとりを聞いていると、特に敬語を使う必要もないようだ。作業を続けながら、この日の授業の連絡事項を聞き漏ら

したという生徒が、「ホームルームに出なかったから、知らなかった」とつぶやいた。授業の出席も強制されず、すべて生徒自身の判断に委ねられる同校だが、新井校長は、「それは自分の責任だね」と優しく論じた。「自由」について考える場面が、この学校では至る所にあるようだ。

自主性を重んじる校風もあり、卒業生の進路も多彩だ。4年制大学に現役で進学する

自由の森学園高校で最も特徴的なものの一つが通知表だ。1、2枚の紙ではなく、1人につき100枚ほどの紙が、ファイルにとじられている。

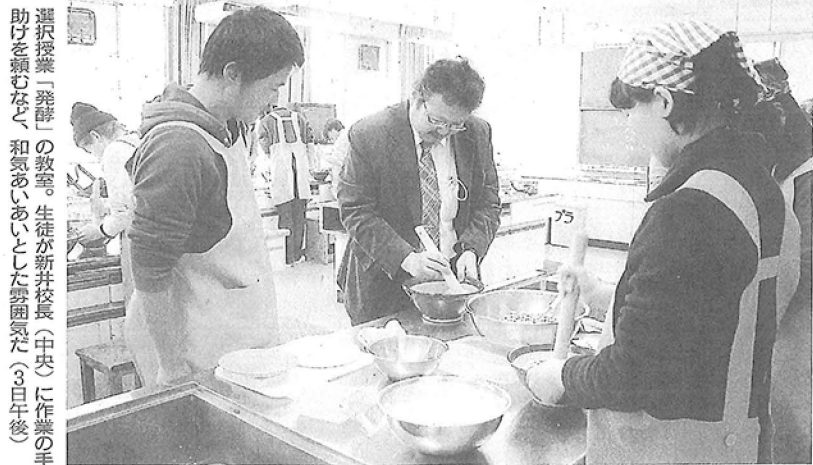
## 通知表 1人につき100枚

ルが書かれた紙が100枚、1冊に詰め込まれている。1人につき100枚ほどの紙が、ファイルにとじられている。

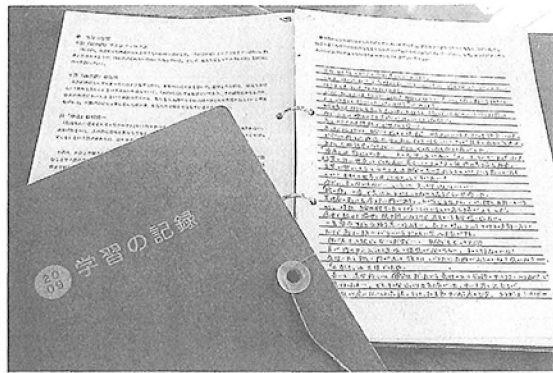
自由の森学園高校で最も特徴的なものの一つが通知表だ。1、2枚の紙ではなく、1人につき100枚ほどの紙が、ファイルにとじられている。同校では期末テストは行わ

ない代わりに、単元が終わるごとに生徒に課題を与える。例えば、現代文では内容についての小論文がエッセイを書き、世界史では「この時代の政権をどう評価するか」といったレポートを提出する。

教諭は点数をつけるのではなく、紙1枚にコメントをきつり書き込んで評価する。このほか、学期末ごとに自分の学習について振り返る「自己評価表」も記入する。これらのすべてによって通知表が形成されるため、分量がどうしても多くなる。この通知表の狙いは、生徒の問題意識や感性を育み、次の学習につなげていくことにあるという。ただ、期末は生徒、教諭ともかなり多忙だ。3年生の松本奏野さん(18)は「これなら期末テストがある方が楽だと思うほど、大変です」と笑う。



選択授業「発酵」の教室。生徒が新井校長(中央)に作業の手助けを頼むなど、和気あいあいとした雰囲気だ。(3日午後)



学習の記録

飯能市の豊かな緑に囲まれた丘の上にある自由の森学園高校は、その名の通り、自由な校風が特徴だ。例えば、校則はなく、服装や髪形に特段の決まりはない。そればかりか、中間テストや期末テストは行わず、本人が希望しない限り、成績の5段階評価も開示されない。そんな独自の教育方針の中で、471人の生徒たちが学んでいる。

2月初め、生徒が学びたい内容を自由に選べる選択授業の「発酵」の教室を訪れた。1年間かけ、発酵食品の作り方などを学ぶこの授業は生徒の間でも人気が高いという。今回は大豆から手製のみそを造るという内容で、生徒たちは煮た大豆をすり鉢でつぶす作業の真っ最中。教室中に大豆のいい香りが漂っていた。

「新井さん、これちょっとお願いします!」そう言って生徒の一人がすり鉢とすりこぎを差し出した相手は、見学に訪れていた新井達也校長(54)だ。生徒と作業を交代した校長は、「僕の家では妻がみそを造っているよ」と親しく話しかける。